

夕立は「ゆうだち」っ  
ぽい！

紅茶味のしふおん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ゆうだち型イージス護衛艦、ゆうだち。

彼女は2035年に進水、就役。

しかし、就役後10日で第三次世界大戦に突入。建造から14日で沈没した。

だが、何もせずに沈んだ訳じゃない。彼女は沈む前にたった一隻で敵艦隊を全滅させてみせた。

そして彼女は沈没後こう呼ばれる。

「—————」 「悪夢の再来」 —————と。

そんな彼女が艦これの歴史へ。

初の護衛艦の艦娘としてどう過ごしていくのか。

# 目次

一章 着任っぼい!

001. 夕立はゆうだちっぼい!

1

002. 歓迎会っぼい! | 8

003. 性能試験っぼい…? | 17

004. 初戦闘…っぼい! | 31

## 一章 着任っぽい!

### 0 0 1. 夕立はゆうだちっぽい!

私は今、困惑している。

目の前の駆逐艦夕立と思しき艦娘から出てきた言葉は、

「私は海上自衛隊、ミサイル護衛艦ゆうだちっぽい!提督、よろしくっぽい!」

「え…?海上自衛隊…?ミサイル…護衛艦…?」

それもそのはず。今まで艦娘として確認されてきたのは旧帝国海軍の者達だ。

煙突から黒い煙を吐き、艦砲射撃をする。

そんな昔ながらの戦い方で深海棲艦を倒していた。

もちろん護衛艦やアメリカのミサイル駆逐艦を作ろうとしなかった訳では無い。

軍の上層部は何度もそういった新型の軍艦の建造をしようとしていたが、艦娘が出現

してからの五年間一度も成功せず、今では無理なのだと考えられている。

しかし、この足立結衣提督率いる横須賀での月に一度の建造の日、そのただ一回で建

造に成功してしまったのだ。

もちろん建造をして新しい艦娘を着任させるには、建造の許可申請と着任の報告が必

要だ。しかし…

ー（もしこの娘が軍の上層部：特に艦娘の子達をを軽視するような奴らに見つかつてしまうと非常にまずい…）

そう。彼女が懸念していたのは「横取り」である。彼女は提督の中でもかなりの艦娘好きであり、仲間ではなく家族のように扱っていた。

彼女は自分の鎮守府で建造したからにはどんな艦であろうと家族として接したかったのだ。

しかしこのゆうだちと名乗る護衛艦の艦娘は、全てのパワーバランスを覆す程強力な艦だ。それを建造したと知ったら艦娘を軽視するような奴らは必ず寄越せと言うだろう。

今後の対応を考え頭を抱える提督だった。

「……私は、光の中にいた。」

私は、艦娘というらしい。

深海棲艦と呼ばれる、敵を倒す存在だと。

私は就役してから僅か10日で戦争が始まってしまい、15日目まで海戦に突入して

敵艦隊を一隻で全滅まで追い込んだ。

その時は悪夢の再来だなんて言われてたらしい。

しかし、敵の最期の足掻き、そのミサイルが直撃、沈んでしまった。

やってやろう。

足りなかった分思いきり暴れてやる。

ゆうだちの力、見せてあげるっぼい!

……なんて意気込んでいると、目の前は鉄の扉に変わり、その扉が開いて光が差しはじめた。

扉が開くと目の前には私の提督と思われる人が立っていた。

挨拶をすると、目を見開いてパチクリしたりして、しまいには頭を抱え込んでしまっ

た。

「あの……大丈夫……っぼい?」

「ん!? ああ大丈夫大丈夫! …改めて、はじめまして! 私が横須賀鎮守府の提督です。ゆうだち、よろしくね!」

「よろしくつばい!」

「よし、じゃあまず執務室まで行こうか。」

「了解つばい!」

執務室に着くと、さつきまでは柔らかい表情をしていた提督が、キツと真面目な表情になってこちらを向いた。

「いい? ゆうだち。突然で申し訳ないんだけど、良く聞いて欲しいの。ゆうだちみたいな護衛艦の艦娘ってまだあなたしかいないの。だからね、貴方の強力な力を求めていろんな人に狙われると思うの。だから貴方を守るために…こうしてもらうのはとても気が重いんだけど…貴方にはしばらく「駆逐艦夕立」として過ごして欲しいの。」

なんと。私のことを気遣ってこんな提案をしてくれた提督にも悪いし、乗る他ないだろう。二次大戦の砲も、練習すれば使えるはず。

「大丈夫です! 私は提督の元から離れたくないし、夕立としてしばらくお世話になります! つばい!」

と笑ってみせた。

「ゆうだち…ありがとう…! うちには夕立が居ないしこれしかないと思って提案したん



「だけど……ごめんゆうだち……私の鎮守府はまださほど大きくない……でも必ず近いうちに夕立を「ゆうだち」としてのびのびさせてあげられるようにするからね!」

「提督、夕立は大丈夫っばい!」

「よし、じゃあよろしく!夕立!」

と笑い合つて、私達は握手をした。

こうして私の駆逐艦夕立としての生活が幕を開けた。

「じゃあ明日はゆうだちの方の性能をテストするから、今日はゆっくり休んでね!鎮守府の案内に時雨をつけたから!」

「了解っばい!」

そう言つて執務室を出ると、駆逐艦の時雨がいた。なんでか分からないけど、仲良く出来る予感がするっばい。

「僕は時雨。よろしく!早速僕がこの鎮守府を案内するよ。」

「よろしくっばい!」

頷くと、時雨は歩き始めた。

「ところで、ゆうだちはどんな艦なんだい?護衛艦はよく知らないんだ。」

と時雨に聞かれたので答える。

「ゆうだちはゆうだち型イージス護衛艦のネームシップとして建造されたっばい。レー

ダー…電探に映りにくいように作られているっばい。護衛艦はミサイルによるアウトレンジ攻撃がメインの闘い方だから格闘戦は苦手っばい。ゆうだちは最新型の武装とか機関とかの実証のための船としての目的もあつたっばい。」

「なるほど…肉弾戦は苦手なんだ…空母の護衛とかもするのかな？」

「基本的にはそんな感じっばい。一応、航空機も積んでるっばい。」

「へえ…他には何か積んでいるの？」

「電子戦装備もあるっばい。電探を妨害したりする装置が積んであるっばい。」

「それは艦にとっては恐ろしいことだね。敵に回したくないや…つと…まずはここが工廠だね。油の香りはあまり好きじゃないな。つてまあさつきここから来たのか。」

「そうっばい。私は機械油の匂い、結構好きっばい。」

「そう？僕はつんと来るから好きじゃないなあ。じゃあ、今は明石さんも居ないみたいだし、次に行くのか。」

「了解っばい！」

…さて…一通り鎮守府を回ったっぼい。居酒屋鳳翔、今度行きたいっぼい。

「じゃあゆうだち、最後は食堂に行こっか。」

「ぼい! ご飯は好きっぼい!」

ぴよんぴよんと跳ねながら「ご飯ご飯と言うゆうだちを見て時雨は…

(ぼいぬ…)

と思うのだった…

次回 ─────────── 歓迎会&amp;amp;性能試験。

## 002. 歓迎会っぽい！

食堂に着いたっぽい。

意気揚々とドアを開けると…

「「ようこそ！横須賀へ！」」

…目をパチクリしていると、時雨が

「ここでは月一回建造をするんだ。それで建造された娘に鎮守府を案内して、食堂で歓迎会をやるって決まりなんだ。」

なるほど…こう言う時は楽しむのが一番っぽい！

「みんなよろしくっぽい!!」

しばらく食事を楽しんでみんなと談笑していると提督が前の方に立って

「はい、じゃあ盛り上がってきたところ悪いんだけど、今日の主役に自己紹介でもしてもらおうかな」

「分かったっぼい！」

呼ばれたので前に出てみんなに自己紹介する…のは良いんだけど…どっちでっぼい？

提督をチヨイチヨイと手招きして呼ぶ。

「ん？どうしたの？」

「どっちで自己紹介すれば良いっぼい？」

「あ…護衛艦ゆうだちで良いよ。この鎮守府のみんなは信頼してるから。」

「了解っばい！」

ゆうだちの方でいいと言われたのでみんなに向き直る。

「私の名前はイージス護衛艦、ゆうだちっばい。どういう訳か初めての護衛艦の艦娘として建造されたっばい。迷惑をかけるかもしれないけど、よろしくっばい……！」  
目を瞑ってみんなからの反応を待つ。

私の予想としては、みんなざわつくだろうと思っていた。異質なものを見る目で見られるのではないかと……と。

しかし、実際に帰って来たのはざわつきでもなく、嫌な視線でもなく、  
——暖かい拍手だった。

嬉しさに涙を浮かべていると、提督が、

「いい娘ばっかりでしょ！彼女達が私の自慢の艦娘たちよ！」

「っばい！みんな改めてよろしくっばい！」

「ここなら、「ゆうだち」も楽しくやっていけそうっばい。」

歓迎会がひと段落して自室に戻って来たっばい。

結局私はこの鎮守府内であればゆうだちとして過ごしていいらしい。

正直夕立を演じるのには自信がなかったから助かったっばい。

てなわけでこれからここで私は頑張っていくっばい。

という感じでぼーっとしていたら、

「ゆうだち、歓迎会じゃ一対一であいさつをすることもなかったからここで改めてお互いに自己紹介、しましょう!」

と声をかけられたので、

「了解っばい!」

と返事をする。

「じゃあまずは私から。私は白露型駆逐艦一番艦の白露よ!ゆうだち、改めてよろしく

!お姉ちゃん

って呼んでくれてもいいのよー！」

お姉ちゃん…いい響きっばい。

「っばい！よろしくっばい！白露お姉ちゃん！」

「じゃあ次は私だね。さつきも挨拶と自己紹介はしたよね。白露型二番艦、時雨だよ。よろしく。」

「よろしくっばい！」

「私は三番艦の村雨、よろしくね！」

「村雨お姉ちゃんもよろしくっばい！」

「じゃあ最後は私ですね！白露型駆逐艦五番艦、春雨です！よろしくお願いします！ゆうだちお姉ちゃん！」

おおぅ…！日で姉と妹ができてしまったっばい。

「よろしくっばい！ゆうだちもみんなに迷惑かけないように頑張るっばい！」

「さ、明日は夕立も私たちも早いから寝ようか！」

と白露。

「白露お姉ちゃん、明日は何かあるっばい？」

と尋ねる。

「明日は主力艦隊が北方海域の攻略、二つある水雷戦隊の一つはタンカー護衛、もうひと



つは資材輸送の遠征ね。鎮守府に残るのは明日のゆうだちちゃんのテストの記録要員の青葉さんと工作艦の明石さん。」

「なるほど…みんな忙しいっばい!じゃあ早く寝るっばい!」

パタパタとアホ毛を上下させながらベッドまで歩いて行くゆうだちの姿を見て同室の全員が思った。

「……(っばいぬ……)」

「それじゃあみんな、おやすみ!」

と言つて白露が電気を消す。

「……おやすみなさーい!」

とみんなが返事をする。

このやりとりでさえも、ゆうだちは楽しく感じていた。

明日が楽しみっばい。

という期待を胸にしまいなながら、夕立は眠りへと落ちていった…。

朝、ゆうだちは朝日で目を覚ました。

総員起こしのラッパが聞こえて来て他の艦娘たちもももぞと動き始める。

軍隊とは言っても、目覚ましのアラームのような感じでこのラッパから5分以内にとかいう規律はなかったっぼい。

私はみんなより一足先に着替えて栈橋を散歩している。

朝日で輝く水面は綺麗っぼい。

なんて思いながら栈橋に腰掛けて足を海の上でパタパタさせると、間宮さんから食堂が開いた放送が入った。

そろそろお腹も減ったし、食堂に行くっぼい。

食堂に来たっぼい。昨日とは別のルートだったけど、何とか迷わずに済んだっぼい。

今日の朝ごはんは…和食っぼい！

「おはようございますっばい!」

「はい。ゆうだちちゃんおはよう!昨日歓迎会でご飯を持っていった時に軽く挨拶したから知ってるとは思うけど、給糧艦、間宮です。よろしくね!」

「よろしくっばい!」

「じゃあお味噌汁を入れますから、ご飯をよそって、鮭とお漬物の乗ったおぼんを右から持っていてくださいね。」

「分かったっばい!」

と言った感じで朝ごはんを食べていると、

「ゆうだち、俺も一緒に食べていいか?あーいや、自己紹介を忘れてた。俺の名は天龍。フフフ…怖いか?」

と聞かれた。

「大丈夫っばい!あと怖くはないっばい!天龍さん!」

「そうか…怖くないか…うーん…。」

ということでご飯を食べ、しばし談笑してから天龍さんと別れた。

彼女は水雷戦隊の旗艦で、今日は資材輸送の遠征に行くと言っていたので、白露お姉ちゃん達と一緒にだろう。

私はこの後午前はゆっくりして…

鎮守府を一人でぶらついてみようかな。

それで午後から性能試験っぽい！

ゆうだちの本気、見せてあげるっぽい！

ーーーーー…次回、性能テスト&amp; a m p ;  
???

お楽しみに。

## 003. 性能試験っほい…?

(ゆうだちの本気、見せてあげるっほい。)

とは言ったものの、午後まで暇で本を読んでいたのは秘密っほい。  
さて、性能試験、やるっほい!

工場に着いたっほい。

明石さんはどこにいるっほい?

「あ!ゆうだちちゃん!ここ!ここ!ここだよ!」

「明石さん、こんにちはっほい!」

「こんにちは、それじゃ早速、青葉も呼んで試験、始めようか。」

「了解っほい!」

しばらくして、青葉さんが来たっぽい。

「ども！青葉です！今日は記録役です。よろしくお願いします！」  
「よろしく願いますっばい！」

「じゃあまずは艦装を呼び出して…呼び出し方わかる？」

「イマイチ分からないっばい。」

「そうね…イマイチファンタジーっばいけどでてこいっ！って念じる感じね。」

「ふむふむ…」

出てくるっばい！と念じてみる。

すると…

光が私を包んだと思ったら、背中に見覚えのある艦橋が。

腕には砲が。

他にも、ゆうだちの装備が体に装備されていた。

「おお…出来たっぼい！」

「無事展開できたみたいね。…うーん…見たことない形の艦装ね…やけに角ばってるし…」

「カクカクしてるのはステルス性を向上させるためっぼい。装甲が薄いから近接戦は禁物っぼい。」

「なるほど…さて。じゃあ始めようか！」

「了解っぼい！」

「まずは海に出ようか。あそこから出るのよ。」

と明石さんはドツクの端を指している。

そこへ行くと先に青葉さんがエンジンを温めているので私もそれに倣ってエンジンを起動する。

「主機、起動っばい！」

ガスタービンエンジンが燃焼を始める。

工廠にガスタービンエンジンの甲高い音が鳴り響く。

「エンジンも起動できたわね、じゃあ海に出ましよう！」

いよいよ海に出るっばい……！

緊張とワクワクが混じってるっばい！



「ゆうだち、出撃っぼい！」

おお…風を、感じるっぼい！気持ちいいっぼい！

「おお、航行は大丈夫そうだね。じゃあまずは速力の試験からやっていこうか。」

「了解っぼい！」

「じゃあ巡航速度から行こう！いつでも初めて良いよ！青葉が後ろをついて行くからね  
！」

「分かったっぼい！」

「軸ブレーキ脱！両舷、出力50！」

と掛け声を出す。

グツと体が後ろに引かれる。

グングンと速度を上げて行くゆうだちに、

「加速速っ！嘘、それで出力50%なの!？」

と困惑する青葉と

「わあああ！」

とはしゃぐ明石。

しばらく航行して元いた場所に戻ってきた。

「流石ね！じゃあ次は最高速度を測っていきましょう！あ、青葉もここで見てて良いわよ。」  
「たしかに離れて見てみたいです！」  
「じゃあ夕立、いつでも良いよ！」

「了解っぽい！」

前を向いて声を掛ける。

「両舷軸ブレーキ脱！最大せんそーく！」

グワツと衝撃が来るが何とか持ち堪える。

先程の速度を越し、さらに加速して行く。

頬を撫でて行く風が気持ちいい。

その後ゆうだちは最高速度でしばらく航行した後、最初の位置に戻ってきた。

最高速度は35ノットだった。

「それじゃあ次は砲撃ね。あそこに的が5個あるから、この距離から狙ってみて。」

「了解っばい！」

戦闘を始める合図を掛ける。

「対水上戦闘よーい！」

警告が鳴り響く。

「目標1〜5番、諸元入力よし！主砲、撃ち方始め！」

ダンツダンツと同じペースで5発の砲弾が発射される。

そして的に当たり、的は海へと沈んでいった。

「自動モード、全弾命中っぽい！」

「自動モード…全弾命中…これが未来の技術か…」

「未来はこんなにも進んでるんですね…」

と感心している声が聞こえて来るが、

「次は手動モードもやるっぽい！」

と前を向き直す。

「主砲、目標座標よし！狙って…撃ち方始め！」

主砲を手に持ち前で構えて狙い撃つ。

結果は5個中4個命中。残りの1つは夾叉だ。

「手動でも練度の高い子並に当たるじゃ無いの…」

「えへへ、レーダーと射撃管制システムのおかげっぼい！」

「これは期待の新人だねえ…」

と談笑していると…

「ツ！レーダーコンタクト！数6、距離40km、こちらに向かって来る。明石さん、今日ここをこの時間に航行予定の艦隊は？」

「…なしょ。」

そう聞いた瞬間、ゆうだちは水面を蹴って駆けだした。

「あ！ちよつとゆうだち！」

明石の呼び止める声は、ゆうだちには届かない。

次回、ソロモンの悪夢、再び甦る。

日差しが眩しい。

…ここはどこだろう。

見渡す限り、海。

私は沈んだはず。

頭に情報が流れ込んでくる。

私は、艦娘。

敵は、深海棲艦という。

私の使命は…護ること。

戦争の道具としてではなく。



そうとなれば何か行動に起こさなくては。

まずは周りの状況を知りたい。

まずは航空機で辺りの地形とか位置を把握しよう。

どんな航空機がいいかしら…

何かあった時のために武装させたのが良いわね…

じゃあ…この戦闘機で良いかしら。

「カタパルト準備完了！航空機は発艦体制に！

甲板上の整備員、風圧に備えよ！」

と声を掛け、しばらくすると、対艦、対空装備を積んだ戦闘機がカタパルトから射出

され、編隊を組んで空へと消えていった。

謎の艦娘は、広い大海原の真ん中で、ポツリと呟いた。

「何も…起らないと良いのだけれど。」

——次回、正体判明。

# 004. 初戦闘…っほい!

「…なしよ」

という明石さんの声を聞いた瞬間、私は駆け出した。

今、鎮守府を守れるのは私と青葉さんしかいないっほい。

ゆうだちがここで減らしておかなきゃっほい。

主砲の射程距離に入ったので戦闘の用意をする。

「対水上戦闘用意!」

敵艦隊、数6、戦艦1、軽巡2、駆逐3。

「対艦誘導弾発射用意。目標、軽巡2、戦艦1、発射弾数3発! 続いて主砲、自動射撃。

目標、駆逐3、戦艦1!」

ミサイルと主砲を使って同時に片付けるっほい。

「撃ち方始め!」

掛け声と共に対艦ミサイルが発射されていく。

インターセプトまであと6秒。

「主砲、撃ち方始め！」

ダン、ダン、と規則正しいリズムで主砲が旋回し、弾を発射していく。  
あと2秒。

「マーク、インターセプトっぽい！」

敵、駆逐3、軽巡2、レーダーロスト。撃沈っぽい。

後は…戦艦っぽい。やっぱり戦艦は硬いっぽい。

生憎今回は主砲と速力試験だったからミサイルがほとんど使えないっぽい。

敵戦艦の状態は…中破。

もう一発くれてやるっぽい！

「対艦誘導弾、目標敵戦艦！撃ち方始め！」

着弾まで6秒。

「マーク、インターセプト！」

敵戦艦、大破。

しかしこちらにもミサイルが尽きた。

このままならやれる。

そう。このままなら。

なんと、敵の戦艦は艦載機を飛ばしてきた。

大破で艦載機を…しづといっばい。

数20。

主砲の残弾数、17。

試験だからといってCIWSの弾とVLSのミサイルを抜かなきゃ良かったっばい。

でも、やれるだけやるっばい!

「主砲、撃ち方始め!」

主砲で対空射撃をしていく。

「トラックナンバー17、ロスト！」

主砲の弾が尽きた。

敵戦艦にトドメを刺したいが武器が無い。

艦載機も迫ってくる。

何か策は…

ふと見ると装備に魚雷が3発。

使うしか無いっばい！

「目標敵戦艦！魚雷発射！」

魚雷発射管から魚雷が発射され、真っ直ぐに敵戦艦へと向かっていく。

敵戦艦も察して回避行動に入る。

…がしかし魚雷は追尾して戦艦へと向かっていく。

「トドメっばい！」

敵戦艦、撃沈っばい。

さて…問題は艦載機。

残念だけど、今のゆうだちに戦闘力は無いっばい。

ここは一旦、退くしか無いっばい。

でも艦載機も追ってくるっぼい。

艦載機が爆弾と魚雷を投下する軌道に入った。

逃げ道を探すが敵は包囲するようにして攻撃を仕掛けてくる。なかなかやるっぼい。

このままじゃ当たる…！

もうどうにでもなるっぼい！

と思い横に跳んだ瞬間、轟音と共に敵の艦載機が爆ぜた。

…あれは…F-35CJ? 何でいるっぼい?

と困惑していると、無線が入った。



「此方は日本国海上自衛隊、航空母艦かが。大丈夫? ゆうだち。」

「かがさん!? なぜここに居るっばい!？」

「さあ…貴方の増援に行つて沈められたと思つたらここよ。艦載機を飛ばして偵察してみたら貴方が敵の艦載機に囲まれてたのよ。」

「なるほどっばい…でも助かつたっばい! ありがとう! かがさん!」

「仲間がピンチなら、助けて当然よ。…とにかく合流しましょう。今のままでは危険よ。」

「了解っばい。」

かがさんが見えてきたっぼい。  
かがさんに手を振る。

向こうも小さく手を振りかえしてくれる。

「合流できてよかったっぼい…」

「さあ、何はともあれあなた、帰るところがあるなら早く帰らないと。このまま海に浮いてるなんてただの的よ。」

「かがさんはどうするっぼい？」

「私は…そうね…できるならあなたのところに行きたいけど。」

「私はいいけど、提督に許可を取らないとっぼい。」

「お願いするわ。」

「こちらは横須賀鎮守府所属、護衛艦ゆうだち」

「ゆうだち！無事だった!?バカ！十分に装備も積まないで敵に突っ込むなんて…おかげで私たちは助かったけどゆうだちが沈んじゃったら元も子もないじゃない!…まずは自分の身を守ること！絶対だよ！いい!？」

「ごめんなさいっばい…」

「わかればいいの分かれば。さあ、元気に帰っておいで！ゆうだち。」

「了解、帰還するっばい！」

「それで提督、この鎮守府に来たいって子がいて…」

「あら、どんな子？」

「無線、変わるっぽい！」

「無線かわりました、かがです。」

「加賀さん？うちに空母少ないから大歓迎よ！ようこそ！」

「いえ、提督…その、私はひらがながなんです。」

「えーつと…護衛艦って事？」

「その扱いで間違いないです。」

「なるほど…どつちにしろ私は大歓迎よ！」

「わかりました。ゆうだちに先導してもらって鎮守府まで行きます。」

「了解！待ってるよ〜！」

「大丈夫っばい、提督さんは優しいっばい！」

と声をかけると、かがは少し笑って

「全部お見通し…ね。」

と言った。どうやら不安そうな顔をしていると思ったので聞いたら凶星だったよう  
だ。

さあて！横須賀に帰るっばい！

鎮守府が見えてきた。

埠頭でお姉ちゃん達と提督が手を振っている。

手を振りかえす。

帰ってきたっばい。

まだ来てから2日目でも。

「ここは…ゆうだちの帰るところっぽい！」

「みんな…ただいまっぽい！」

「おかえり」

とみんなが声をかけてくれる。

向こうで母港にいたのはほぼ一日。

母港の実感だなんて湧かなかった。

なにかが足りなかった。

それはきつと…「温かさ」っぽい。

この温もり、大切にするっぽい。